



特定非営利活動法人 なんとなくのにお 通信

URL <http://www.nantonakuno.net/>

Mail [info@nantonakuno.net](mailto:info@nantonakuno.net)

## つくって食べよう

### 【でも、感染注意だよね！】

コロナ蔓延のため、夏から秋にかけて、お休みしていた

【つくって食べよう！】を再開しました。ウィルス、心配なので高温で焼くものからと、バターたっぷりのクッキーを焼いてみました。春に新調した電気オーブンで見事に焼き上がりしました、評判は上々。焼く前とできあがりの写真です。

「食べるときは離れて、別々の方向を向いて」との注意で、せっかくのお菓子の時間も話さずにもぐもぐ...なのは、残念ですが仕方ない。

月末はハロウィン。「かぼちゃのチーズケーキ」作ろう！

ということでスタッフは材料を買出し。かぼちゃは畑で作ったという小型かぼちゃ数個の提供がありました。かぼちゃ400g、生クリーム200g、クリームチーズ200g、などなど。材料がそろくと、調理チームの出番です。てきぱきと動き、あつという間に材料を混ぜて下ごしらえが終わりました。



田川にかかる橋の上から。流れの中、梅花藻の花が涼しそう。(9月)

オープンレンジの予熱もOK。170度、45分にセットしてあとは待つだけ。ケーキの焼けるにおいが居場所に広がりました。焼き終わった時刻は午後4時。明日のお楽しみとなり、荒熱を取って冷蔵庫へ。次の日は、みんなでいただきました。かぼちゃがしっかり自己主張しながらチーズとまじりあい、甘さも適当。おいしいハロウィンのケーキでした。

micro:bit チームは、【つくって遊ぼう！】をやってます。写真は、Meowbit という Makecode Arcade対応端末でミニゲームが動いているところ。

1.8インチディスプレイ、6個の押しボタン、充電可能なバッテリーも付属。micro:bitと同じ開発環境でゲームを作り、その機械語イメージを書き込めば小さなゲーム機として遊べます。MicroPython言語も動き、サンプルが開発元のHPにたくさんあります。



## 傾聴ボランティア「ありのまま」勉強会

「ありのまま」さんの勉強会に招かれ、「なんとなくのにお」の活動を紹介する機会をいただきました。

NPOを始めた17年前、当時の今市市教委に働きかけ、報徳会館を拠点に「子どもの居場所」を開いた頃から日光市委託までの足跡、現在の居場所の様子について、手塚が話しました。つぎに西尾から相談支援「さくらそう」の役割、居場所との関連について説明しました。後半、子どもたちとスタッフのやりとりの様子、居場所の雰囲気などの質問を軸に、熱心な話し合いが継続しました。10月13日(土)、まだまだコロナ感染が心配な中、支援センター会議室で活発な議論ができたことに感謝します。「ありのまま」のみなさま、ありがとうございました。(西尾、手塚)



## 目次

つくって食べよう！でも、感染注意	1
それ、計算機で解けるの？	2
教育機会確保・連絡会に参加	3
活動報告	3
こんな本はいかがが・55	4

## 居場所のひとこま

LinuxPC にフリーソフトの「GIMP」をインストール。お絵描き用 PC を作りました。「タブレットがあるといいね」とペンタブレットを購入。マウスに比べ、画面に線を引くのは楽ですが、使いこなすには練習がいりそうです。現在、スタッフがあれこれ体験中。(N)



## それ、計算機で解けるの？

先月、見学のため居場所に来てくれた小学生、「算数がいや」と言う。どうしてと聞くと「同じような問題を次々に解かされるから」。学校には昔から、反復学習が内容の理解と定着につながるという考えがあって、「ドリル」で学習を進める時間がたくさんある。「いや」というのは、とっくにわかっていることを何度もやらされるがつまらないのか、理解していないまま問題に向き合うのが苦痛なのか、その子の「いや」はとりあえず置いて、いまここで楽しめるテーマを探した。

「証明できたら1億2千万円あげます」と、どこかのベンチャー企業が懸賞金をかけたことが話題になった「コラッツの問題」が気になっていた。2以上の整数(n)を持ってきて、その数が奇数のときは3倍して1を足す(3n+1)。偶数のときは2で割る(n/2, 偶数だから必ず割り切れる)。この計算を繰り返すとたいていの数は「1」に落ち着くらしい。2以上のどんな整数を選んで、最後は必ず「1」になることを証明できるかという問題である。「証明できたら1億円。だけど全部の数について証明するってどういうことなんだろうか」と話しかけた。小学校の算数に「証明」がないことに気づいたけど、その子が顔を向けてくれていたので続行。3、7などいくつかの数について、この規則で計算した数値を順番にメモ紙に書きながら「たしかに1になりそうだけど、数は無限にあるから、いつになっても全部の数字を調べることはできないよね」というところで、この話題はおしまい。興味を持った様子だったので、「算数はいやかもしれないけれど、こうやって計算で遊ぶこともできる。もうちょっとしたらAくんは『数学』が好きになって、この問題を解くかもしれないね」と言ったら、ちょっとうれしそうな表情を見せてくれた。

この「コラッツの問題」、簡単な整数演算の繰り返しなのでプログラムを書き、最初の数を与えて「1」になるかどうか順に確かめることができる。コンピュータで証明できそうな気もするが、残念なことに「2」以上の整数全部を計算で証明するのは不可能だ。しかし、プログラミングの問題として小学生でもチャレンジでき、コンピュータを使った「数学」に関心を持つきっかけになるのではと、話しながら気づいた。あとでネットを調べてみたところ、「小学生が『スクラッチ』で作ってみた」というサイトがあった。

今年のノーベル物理学賞は「気候などの複雑な現象に隠されたパターンを見つけた」3人の科学者に与えられることになったという。とくに1960年代にアメリカを研究場所として、当時最先端の計算機を駆使し「二酸化炭素の温室効果」を示した真鍋淑郎さんが3人のひとりだった。真鍋さんの業績についてまったく知識がないのでノーベル賞委員会のホームページを開いてみた。そこには「1960年代に気候モデルの開発の基礎を築き、大気中の二酸化炭素濃度上昇が地球の表面温度上昇にどのようにつながるかを示した」とある。一般向け解説文<sup>[\*]</sup>の3ページ目に、真鍋さんの考えた気象モデルが図示されている。

[\*] <https://www.nobelprize.org/uploads/2021/10/popular-physicsprize2021.pdf>  
いくつかの条件を仮定し、その相互作用、とくに太陽で暖められた地熱がゆっくりと大気に伝わり、気候に影響すること

を数値化して計算に取り入れたことが成功の鍵だったらしい。数値化するというが、これはたいへんな作業である。どれだけの熱がどれだけの時間の遅れで大気をあたためるのか。いくつかの値を仮定した数値計算を行うことになる。納得のいく気候モデルを作り上げるためには、多数の初期条件やパラメータを決めなければならない。数値を少しずつ変えながら最適値を探すために気の遠くなるような計算を繰り返したことだろう。当時の計算速度はデスクトップPCの10万分の1以下、今なら1秒足らずで終わる計算が1日かかる。しかも毎日膨大な計算機の使用料を払わなければならなかったという。困難を克服し、コンピュータによる物理現象のシミュレーション手法を確立。気候変動に警鐘を鳴らしたパイオニアとしての功績は大きいと思う。

真鍋さんが気候モデルに取り組んでから60年が過ぎ、その間にコンピュータの性能は飛躍的に向上した。しかしコンピュータの「計算機」としての本質は何も変わっていない。数値シミュレーションは、基本となる理論、初期設定値や係数のごく小さな違いが数値計算に影響し、「100%正しい」という結論は出てこない。「こういう仮定のもとで、この手法で計算すると、これくらいの精度で予測できる」というややこしい結論が得られるだけである。先ほどのノーベル賞財団・一般向け解説の中にも「来年の12月10日、ストックホルムの天気はどうなるかは(気候シミュレーションでは)わかりません。けれど、来年12月のストックホルムの平均気温や降雨量は予測できます」という記述があり、気候シミュレーションとその結果解釈の難しさを伝えている。

「コラッツの問題」のように子どもたちが興味を持つテーマを探し、プログラムを作り、「算数」を瞬時にこなす様子を見せることは情報教育の第一歩ではないかと思う。コンピュータは名前のとおり、「計算機械」。大量のデータを管理し検索する「データベース」も、制御系の開発が飛躍的に進む「ロボット」も、話し相手になったり未来を予測したりする「人工知能」も、組み込まれているコンピュータのやっていることはすべて「数値計算=算数」である。大量の計算を必要な精度で誤りなく実行するために、それまでの知識の蓄積と多くの改良、そしてたくさんの「仮定」が付け加えられていることを忘れてはならない。「仮定」が間違っていれば結果の信頼度は下がる。「人工知能の予言」など安易に受け入れてしまわないためにも、「それって、どんなふう計算されたの」と疑問を持ち、自分で確かめようとする「プログラミング思考」を子どもたちに身につけてほしいと思う。(手塚)

※ 朝日新聞 2021/10/26(火)に「コラッツ予想」の解説が載っています。

### 子育て・親育ちの茶話会

場所： 子どもの居場所 (日光市平ヶ崎)

日時： 毎月第2月曜日 (午前10時～12時)

次回の予定は電話でお問い合わせください。

参加費： 300円 (お茶代)

同じ悩みを持つ親御さん同士、気持ちを許し合って、情報や悩みを分かち合いましょ。 「一人で悩まず、みんなで！」を合い言葉に。

(Tel: 090-3227-7079)

# ☆ 活動日誌

- 7月26日(月) 通信「なんとなくのひろば」第64号 発行
- 7月25日(日) ベリー会：月例会
- 9月7日(火) 第103回 理事会
- 9月30日(木) 「子どもの居場所・学びの場」の委託金についての要望書を日光市に提出
- 10月9日(土) 傾聴ボランティア「ありのまま」勉強会に参加
- 10月13日(水) 学校以外の場における教育機会の確保に関する連絡会
- 10月31日(日) ベリー会：月例会

さくらそう関連の勉強会など

[2021年度・日光市相談支援専門員連絡会]

7月29日(水) 野中式事例検討会

[2021年度・日光市障害者自立支援協議会]

8月10日(火) 第1回 相談支援実務者会議(中止)

8月26日(木) 栃木県精神障害者地域移行・地域定着支援関係者研修(基礎編)



## 居場所利用のお願い

新型コロナウイルス感染の広がりについて、まだまだ安心できない状況が続いています。感染症の終息まで、以下の点にご注意いただき、感染に配慮した居場所利用をお願いします。



- (1) 12時30分～16時30分まで居場所を開所します。
- (2) 来所前は体温測定および手洗いを行ってください。
- (3) 風邪の症状または発熱がみられるときは来所を見合わせていただくようお願いいたします。
- (4) マスクの持参と着用をお願いします。

マスク予備、マスク苦手な人へマウスシールドを玄関に常備!

感染力、致死性が強い「変異ウイルス」はいままでのインフルエンザと違い、「無症状の感染者が他に感染させる場合がある」という特性を持ちます。「私は感染しているかもしれない、気付かないうちに周囲に感染を広げるかもしれない」と自覚し、人との接触を避ける行動を。

▼ 密な空間を避ける(互いに手の届かない位置で)

▼ 大声での会話、同室での食事をしない

▼ マスクをきちんと付ける を守りましょう。

空気清浄機を導入+窓を開け、空気入れ替えを行っています。

10月に厚労省から「使い捨て手袋」の配布がありました。

活用させていただきます! (上写真)

## 学校以外の場における教育機会の確保に関する連絡会に参加 (10月13日・水)

2016年に「義務教育の段階における普通教育に相当する教育の機会の確保に関する法律」ができました。さまざまな理由で学校に行きづらい子に対して、学校復帰を前提とせず、一人ひとりに合わせた教育の機会を確保していくことを求め、不登校の子どもたちを支援するための法律です。学校と民間団体との連携を進めることも明記されています。

この「教育機会確保法」(略称)が動き出してから5年が経ちました。昨年行われた県教委の実態調査(不登校支援連絡会議、昨年夏に来所:通信61号)を経て、今回の連絡会が開かれました。会のプログラムについては、下野新聞の記事をご覧ください。

参加者50数名のうち、およそ40%が民間施設・団体のメンバでした。新型コロナ蔓延の影響で、ほとんどの方と会うのは2年ぶり。「しばらくです。元気でやっていますか」といった雰囲気情報交換がはずみでした。当居場所チラシと通信64号を会場で配布でき、日光市委託の居場所事業、あわせて福祉系の相談支援事業との連携という他の団体にはない特色をアピールできたのではないかと思います。今後も、このような連絡会によって、学校とNPOなどとの連携が深まっていくことを期待します。(手塚)

下野新聞

2021年10月14日 より転載

「不登校の児童生徒が年々増加する中、行政と民間の関係者が相互理解を深めながら連携し、子どもの実態に応じた効果的な支援の在り方を考えることが目的。市町教委や、フリースクールなどの民間団体・施設から計約50人が参加した。県教委の担当者が県内の不登校の現状や課題について説明した後、県若年者支援機構の中野謙作代表理事(61)が「不登校・ひきこもり支援の現状と学校外の会」を宇都宮市瓦谷町の県総合教育センターで初めて開いた。

その後、参加者は地域ごとにグループに分かれ、各自の取り組みや抱えている課題などについて1時間近く意見を交わした。

会終了後、中野代表理事は「県レベルでこういった場はなかった。県として官民の連携が始まり、話し合いができて有意義だった。今後は市町でもこういった機会が増えていく」と話した。

連絡会は今後も継続して開催していくという。(田中えり)

## 不登校支援へ官民連携 県の連絡会

県の連絡会

特定非営利活動法人 なんとなくのこわ通信

〒321-1261 栃木県日光市今市378  
電話 090-3227-7079 / email: info@nantonakuno.net  
ホームページ <http://www.nantonakuno.net/>



## こんな本はいかが？ その 55

### 風車小屋だより ドーデー 作 (桜田 佐 訳 岩波文庫)

スイスにある三日月の形をしたレマン湖の水は、その西端から溢れ出し、ローヌ川は蛇行して国境を越え、フランスのリヨンにたどり着き、リヨンからまっすぐに南下して地中海を目指す。河口周辺からイタリア国境まで広がるのが南仏プロヴァンス。小都市アルルの近くに立つ、古びた風車小屋の主となった詩人・小説家であるドーデーの短編集である。

「風車小屋だより」は序と24の短い小説からできている。3分の2はプロヴァンス地方が舞台、3分の1はコルシカ島にまつわる話やアルジェリアのできごとが描かれている。冒頭の「序」で風車小屋が紹介され、次の「居を構える」によって小屋の雰囲気、プロバンスの美しい風景が描かれ、ドーデーの世界に引き込まれる。続くいくつかの短編ではこの地方の人たちの生活と信条が生き生きと描写されている。ロマンチックなおとぎ話「星 (プロヴァンスのある羊飼いの物語)」は何度も読み返してしまった。羊飼いの語る星座の話が興味深い。ほかには、悪夢のような話、難破船、いつも作者の心にあるバリへのあこがれ。美しい物語だけではない。フランス社会の矛盾や差別も暗示される。

ドーデーで思い出すのは短編『最後の授業』。昔の小学校教科書に入っていた。フランスのアルザス・ロネーヌ地方の学校での出来事である。普仏戦争の結果、この地域はドイツに割譲され、明日からフランス語教育をやめ、ドイツ語を教えることになった。先生は「フランスばんざい！」と黒板に書き、教室を去る。記憶に残る場面である。ところが、アルザスで元から使われてたのはドイツ語系方言であった。この地域でのフランス語教育自体が言語による地方文化の破壊ではないかという論調がクローズアップされ、1986年以後、日本の教科書から消えたという。ドーデーはこんなプロバガンダ小説を書いてしまう一面も持っていた。

この欄に、『昆虫記』に夢中になっていた小学校時代の思い出を書いたことがある(通信20号)。作者のファブルはドーデーと同時期にプロヴァンスで活躍した博物学者である。『昆虫記』はその後も繰り返し読んだけれど、プロヴァンスに行きたいとは思わなかった。けれど、『風車小屋だより』を読み終えたとき、南仏の乾いた空気に触れてみたい、ローヌ川が地中海にそそぐ風景を見てみたいという気持ちがわいてきた。ドーデーの巧みで多彩な、語りの魔法に騙されたのかもしれない。(手塚)

## 私たちの活動目的：

日光市とその周辺地区に居住する子どもおよび青少年等に対して、学習や自立のための支援活動と地域への啓発活動を行い、社会に出た後も継続性のある、支援と学びの場を作り出します。

## 私たちの事業：

- ① 子どもたちの自主性および自立性を尊重した居場所の提供および学びの場の運営
- ② 子どもたち一人ひとりに対応した、新たなカリキュラムや学習内容の開発
- ③ インターネットなどのIT環境を活用した学びの支援
- ④ 教育についての相談や情報提供活動
- ⑤ 学校外で育つ青少年の自立に関する相談および就労を支援する活動
- ⑥ 自然環境の中での学びを作り出し、自然環境保全の大切さを啓発する活動
- ⑦ 障がいの理解および啓発に関する企画運営事業
- ⑧ 第二種社会福祉事業の相談支援事業経営

## 会員について

- 正会員：51  
賛助会員：15  
団体会員：4  
入会金なし  
年会費(一口)  
正会員 3,000円  
賛助会員  
個人 5,000円、団体 10,000円



私たちの活動は会費と寄付金でまかなわれています。会員継続、応援をよろしくお願いいたします。

会員は新たな事業の提案、会の事業の運営などに直接かかわることができます。

みなさまの積極的な参加をお待ちしています。

## なんとなくのへや

話題の映画「MINAMATA」をみてきた。100席くらいの映写室だったが3、4割のシートが埋まっていた。若い人も関心を持っているのかなと思った。工場廃液中の有機水銀が熊本県水俣の環境汚染を引き起こした。その被害を世界に発信した写真家

ユージン・スミスの「史実にもとづいた話」である■デジカメなどはない時代、1970年頃の写真は光化学反応の応用技術だった。フィルムや印画紙の現像・定着は暗室で行う。真っ暗では仕事ができないので、感光剤への影響が少ない、弱い赤色光下での作業である。目が慣れるのに15分はかかる。X線回折実験のフィルム現像や、素粒子の相互作用をとらえる原子核乾板という高感度の特殊フィルム現像などを経験したことがあり、映画の暗室シーンの赤い光にとっても懐かしさを感じた。ちょっとした研究室や学校には(もちろん写真屋さんにも)そんな暗室があった■50年が過ぎた今、水俣に当時の風景はなく、撮影はアドリア海の東、セルビアやモンテネグロで行われたという。映画の中身についてあれこれ書く余白はないが、日本人俳優はなかなか頑張っている。おすすめ映画ではと思った。(T)